櫻園通信 13　平成 16 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

社会福祉事業としての『養育院』事業は、多くの人の公益に対する思いがより合わさってできているものであろう。ことに、渋沢栄一の半世紀を超える、養育院事業の維持・発展に尽くした功績には計り知れないものがある。養育院 80 年史に、その功績を総括した文章があるので紹介する。その中で、青淵回顧録を引用して、渋沢の社会事業感が述べられている。いわく、「人間は本来平等のものである、然るに一方は飽食してなお余りあるのに、一方は飢餓に瀕して苦悩を訴えている。この場合には他人は他人で、自分は自分であるといって、少しもおもいやりの心を起こさなくてもよいものであろうか・・・」。100 年以上前の言葉である。

アダムスミス風の考え、ハイエク風の考え、リーマンショックの時代を経て、21 世紀の今日、改めて渋沢の思想が、ドラッガーなどにより再評価される理由である。

七分積み金制度を作った松平定信（白川楽翁）の為政者としての覚悟を記した、吉祥天に対する起請文の写しを、自身の讃を付して養育院長室に掲げた渋沢の思い（展示中・・・）

大久保一翁の、「養育院掟書」の冒頭に付した、人間の基本理念としての互助精神（パネルに記載）・・・そのような人格のより合わさったものとして、養育院事業は存在しえたのであろう。

養育院80年史より－渋沢院長の功績

本院創立以来昭和六年一一月逝去されるまで実に五〇有九年間、本院事業のため、ひいては本邦社会事業発展のため尽瘁された故渋沢栄一院長の功績は偉大なるものがあり、本史冒頭からその献身的努力と高邁なる人徳については縷々述べてきたが、こゝに故渋沢院長の人となり及び本院関係の主なる事績について略述する。

天保一一年二月一三日武蔵国榛沢郡血洗島村（埼玉県大里郡八基村）に出生、後に一橋藩に出仕し、慶応三年フランス万国博覧会に水戸の民部大輔の差遣に際してこの随員として同三月一行と共に渡仏した。明治元年一一月帰朝、既に大政を奉還して静岡藩主であつた徳川家に仕えて勘定組頭に就任されたが、明治二年一一月新政府に出仕を命ぜられ大蔵省租税正に就任、以来累進して大蔵少輔となり、明治草創期の我が国財政の確立に貢献されたが同六年五月官を退き第一国立銀行の設立に意をそゝがれたのである。

越えて明治七年五月一一日静岡藩時代の旧知であつた東京府知事大久保一翁氏から共有金（楽翁公創設の七分積金）の取締を托され、営繕会議所頭取になり同時に養育院事務を管理されることとなつたのである。即ち本院事業に関与された端緒であつた。

其の後における事績については既に前各章において記述された通りであるが大綱的に述べるならば、先ず明治一五年東京府会に養育院廃止論が提議されるや、この阻止に百方奔走しこれを阻止し得たが、明治一八年六月限り養育院事業を地方税支弁から廃止することに決定され、院の存続が危うくなつた際、この存立に尽瘁して同一八年二月有志と共に、院の経営を委任されたのである。また後援団体である婦人慈善会の設立、演劇慈善市の開催等院資の増殖に努められた。明治二二年東京に市制が施行され、院長の申出により事業並びに財産の全部を引継いだ、そして本院委員長に推進され従前通り院務を統轄されたのである。

明治二七、八年の日清戦争前後市内に多数の浮浪少年が放浪し、感化救済の必要が痛感されたので同三三年七月院内に感化部を設置し、更に別置する必要を認め北多摩郡井之頭（現、三鷹市井之頭公園）御料地を拝借し、同三八年三月感化部施設として井之頭学校（現萩山実務学校）を創設された。

明治四一年一〇月、中央慈善協会会長に就任、翌四二年三月西巣鴨町に普通児童収容施設として巣鴨分院（現、石神井学園）を別置し、同年虚弱児養護のため千葉県船形町に安房分院（現、安房臨海学園）を創立、更に大正三年北豊島郡板橋町（現、板橋区板橋町）に肺結核療養所として板橋分院（現、本院分室）を設置し市の療養事業に先駆する等、養育院分化施設を発展拡充された。

その他大塚本院の板橋町移転、大震災の為ほとんど全潰した安房分院の復旧工事の完成等、その功績は枚挙にいとまがない。

又養育院入院の癩患者の治療に関連して、日露戦争前後から癩療養所の設立運動を起し、癩予防法の制定、道府県連合癩療養所設置の促進となり、昭和六年一月癩予防協会を創立し会頭に就任、更に方面委員事業についても同年五月全日本方面委員連盟会長に就任され救護法の実施促進に努力された。

こゝに渋沢院長の社会事業観を青淵回顧録から摘記する。

「人間は本来平等の者である、然るに一方は飽食して猶余りあるのに、一方は饑餓に瀕して苦悩を訴へている。此の場合には他人は他人で、吾人は吾人であると云うて少しも惻隠の心を起さなくても可いものであらうか。私は矢張り社会政策の上から云うても、貧窮の為に漸く不良の心を助長して社会に害悪を及ぼす様な人々を慈善事業に依つて之を未然に防止する時は、他日弁を用いなければならぬ者も嫩葉のうちに摘み取ってしまう事が出来ると思う……中略……慈善という事は敢て養育院に限った訳ではないが、養育院は慈善の為めに作ったのであつて、然かも非常に重大な社会政策を意味して居るものである。近頃社会問題の研究が頗る盛んになつて来たのは喜ばしい傾向であるが、それにつけてもこの慈善ということに就いて、真先に社会上且つは経済上の問題として研究して貰いたいと思う」（青淵回顧録）

又院長は明治三三年男爵を、大正九年子爵を授けられたが、昭和六年一一月一一日九二才の高齢で逝去された。

澁沢院長の銅像建設

大正一三年一二月末「東京市養育院長渋沢子爵の功績を記念する為め、其銅像を院内に建設し、同院に寄附するを目的」とする「渋沢養育院長銅像建設会」が設立され、渋沢院長の徳を偲ぶ為院内に建設し本院へ寄附されることになった。

この建設会の発起人は当時の東京市長、同助役、東京市会議員及び養育院常設委員一同、並に養育院幹事等であり、同会役員は次の通りであった。

会　長　中村是公　　専任理事　小坂梅吉
理事男爵　大倉喜八郎　　理　事　田沢義鋪
理　事　安東正臣　　同　大岩豊吉
同　田沼義三郎　　同　三井元之助
同　岡田忠彦　　同　天利庄次郎
同　荘清次郎

各界有志に設立趣意書を通じて寄附を募り、同一四年三月中、彫刻家小倉右一郎に依頼して銅像の製作及び附帯工事の造営に着手し、同年一一月初旬に一切の工事を竣工し本院に寄附され同月一五日除幕式を行った。

この像は青銅坐像で総高さ一〇尺、重量四八〇貫、台石は花崗岩で高さ一六尺平面方二〇尺の巨大なものである。

なお、この建設の収支決算概要は次の通りであった。

収入　一、金三三、〇四二円九六銭　寄附金並に利子収入
支出　一、金二八、四〇〇円　工事費
一、金四、六四二円九六銭　雑費

この銅像建設に対して、寄附された人員は六五〇人で、寄附の口数は六、五四八口（一口、五円）、寄附金額は三二、七四〇円に達した。

設立趣意書

終始一貫其首脳者として拮据経営の重責を負ひ、前後半世紀間、無慮六万の老廃窮孤の薄倖なる同胞を救護し、帝都の社会事業として規模実質共に能く東京市の面目を立つるに至りしもの、一に子爵の熱烈なる努力の賜にして、我等市民の深く之れを多として已まざる所なりとす、而して今や同院は時代の必要に迫られて、多年計画し来りたる改良拡張の工事成りて、市内小石川旧所在より郊外板橋町の新築場舎に移転し、面目亦た往日の比にあらざるものあり、而して此機会に於て、吾人同志胥謀り子爵が終生の事業として努力せらるゝ養育院の構内に其銅像を建設し、一は以て其功績を記念するの微意を表し、他は以て後人をして永しなへに其徳を偲ばしめんとす、吾人の企望豈に徒爾なりと云ふべけんや。

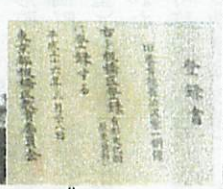
以来この銅像は、院の至宝だけではなく、本邦社会事業史上の記念物として、本院事務所前（現、本院南側用地）にその姿を見せていたのであるが、たまたま、昭和一六年一二月、起った第二次世界大戦中、戦争資材の一部としてこの銅像も回収を余儀なくされ、銅像に代る同型の石像を設置し今日に至っている。

「旧養育院の渋沢銅像」は、様々な経緯を経て、今日、新しいセンターに向かって微笑みかけている。フロックコートを着てソファーに腰掛け、毎々爺然と施設の行く末を見ているが、平成26年、板橋区の有形文化財に指定された。この銅像の変遷については「櫻園通信 3.4.号」に記載している。養育院80年史（昭和28年刊）では、戦時の金属供出のため下におろされ、代替コンクリート像が作られたことまでが記載されている。おろされた銅像は施設の片隅の倉庫の横に置かれ、兵器製造のため供出を待っていた。昭和20年5月の空襲で施設が焼夷弾で焼かれ、本来銅像のあった場所（現在の中学校の体育館の校庭より）は炎上しているが、片隅に置かれていた銅像は焼け残った。昭和32年(1957)に存命の作者の監修を受けて修復再建されている。

様々な団体が、様々なスタイルの銅像、石造を作った近代以降の人物を、渋沢栄一以外に知らない。日本銀行の前の常盤橋公園に立つ朝倉文夫作の大きな立像。帝国ホテルの敷地にある、大理石の胸像。一橋大学の如水会館（同窓会館）ロビーの胸像、飛鳥山の旧邸にある銀行協会の若々しい立像、史料館の銅像、頭部石像。生まれ育った埼玉県深谷市にいくつもある銅像。生家にあるパリ出立時の侍姿の銅像（これは、平成になって建てられた）、青森県の小牧温泉にある立像・・・・

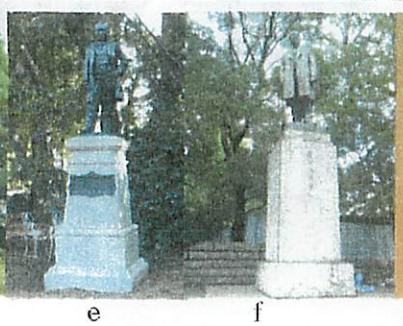
a

b


c

a：現在の板橋像　b：戦災後のコンクリート像
c：登録書　d：深谷の生家、パリでの侍姿
e：銀行協会・飛鳥山邸
f：日銀前（常磐橋公園）
g：一ツ橋大学、如水会館　h：深谷駅前
i：渋沢史料館（飛鳥山）
j：渋沢史料館：頭部石像

d


e　f

g

h

i

j